

企画展示

「不安」から照らす「生」の諸相 × 高松平藏 ドイツの地方都市から考える、『余暇』の未来

西洋と東洋の違いはあるものの、市民革命を経験せず、しかし後発国としては急速に近代化し、第二次世界大戦に敗れた後にめまぐるしい経済成長をしてきたという点で、ドイツと日本には興味深い類似点がある。

ジャーナリスト高松平藏氏は、そのようなドイツの地方都市に在住し、まちづくり、スポーツ、文化、教育などについて、示唆に富む情報を日本にもたらしている。グローバル化によって政治・経済・社会が高度かつ複雑に絡まりあう現代を、我々は生きている。そのような不安の時代にあって、日々の暮らしから自分たちの社会をいかに創っていけるのか。「西洋の先進事例」なるものの輸入の構造的困難や空虚さも含めて、ドイツの地方都市から照射される日本の今とこれからの姿を、一緒に考える機会としたい。

高松平藏氏による講演「ドイツの地方都市から考える、『余暇』の未来」、そして「不安と生の研究会」が繰り広げる、文化、スポーツ、芸術、文学、心理、情報、そしてまちづくりの相互連関的な世界を、ともに逍遙いただければ幸いである。

主催： **不安と生の研究会** ・愛知県立大学長久手キャンパス図書館

共催：愛知県立大学全学同窓会

期間：2023年10月23日(月) ～ 11月17日(金)

会場：愛知県立大学 長久手キャンパス図書館 1階ロビー

日独の芸術祭 ～アートは主体を形成するか～

藤原 智也

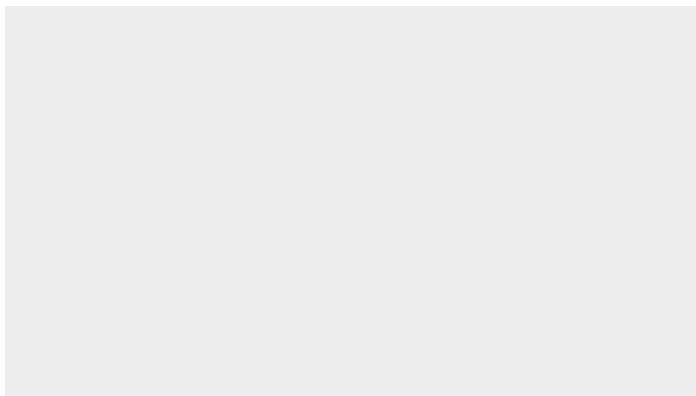
(教育福祉学部 教育発達学科)

現代アートを主とする芸術祭が、先進国を中心に開催されてきた。その出発点はヨーロッパである。歴史が長いのはイタリアのヴェネツィア・ビエンナーレだが、現代的な芸術祭の格子を作ったのはドイツのドクメンタであることが知られている。

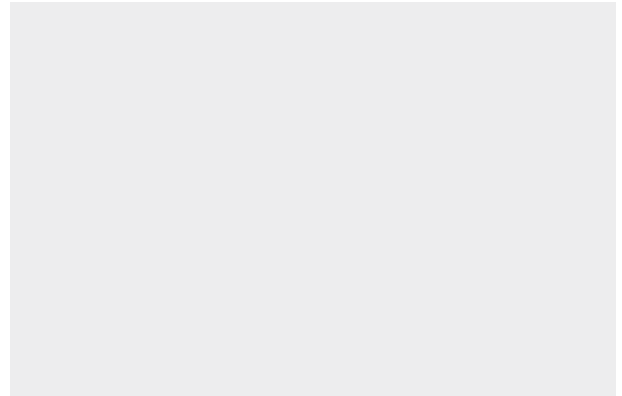
芸術祭の中核に置かれているのは現代アートである。その祖であるM.デュシャンは、アートを「視覚の愉悦」から「思考の促進」へと再定義した。それ以降、美術/アートは権威主義的な額縁絵画や美術館から解放され、インスタレーションやパフォーマンスなどの表現手法を開拓しながら、市民参加の仕組みも部分的に取り入れつつ、まちなか展示を始めとする脱美術館の理念が実践的に試みられてきた。戦後のその中心の一つは、間違いなくドイツのドクメンタであった。そこで試みられてきたのは、とりわけ社会に関する思考の促進を主題化した表現であった。その表現は、社会的コンフリクトの可視化であり、我々が歴史や自然、そして人間とどう向き合うのかの問いかけであった。ここには、近代化による分業化によって、美術が美術を自己目的化するとともに専門家によって囲い込まれ、人々の生活や社会と美術が無関連化してきたことへの反省があった。

日本でも、芸術祭が全国で実施され、現代アートに触れる機会が増えている。しかしそれが、ドクメンタをはじめとするヨーロッパの芸術祭と大きく異なるのは、人種問題の主題化、政官財界への痛烈な批判、両論併記による戦争の記憶（ドイツが何をしたのか・何をされたのか）などが、基本的に扱われていないことである。そこには、運営中枢に地方の政官財界の主要人物が名を連ねる権威主義的図式を背景に、検閲や忖度のリスクがつきまとうマネジメントを所与のものとし、思考の促進を担保し得ない芸術祭実施がある。その中では、税金に過剰依存した運営体制、広告代理店的動員を伴った短期間での規模拡大、行政立美術館を主要会場としながら経済効果を優先させる仕組みづくりがある。

ドイツと日本は、近代化の多くのプロセスを共有してきた。しかし、現在の両者には、大きな違いがある。その背景には、余暇の時間に、芸術を介した「思考の促進」を取り入れるのか、エンターテインメントに埋没して「思考停止」に耽るのかという、芸術や文化に関わる生活の差があるように思われる。



あいちトリエンナーレ実行委員会中枢（自治体首長ら）



ドクメンタ 実行委員会中枢（芸術専門家ら）

イメージの氾濫・モダン都市東京

〈東京、東京、その名の何にすればしかく哀しく美しきや。〉

〔北原白秋「餘言」『東京景物詩及其他』〕

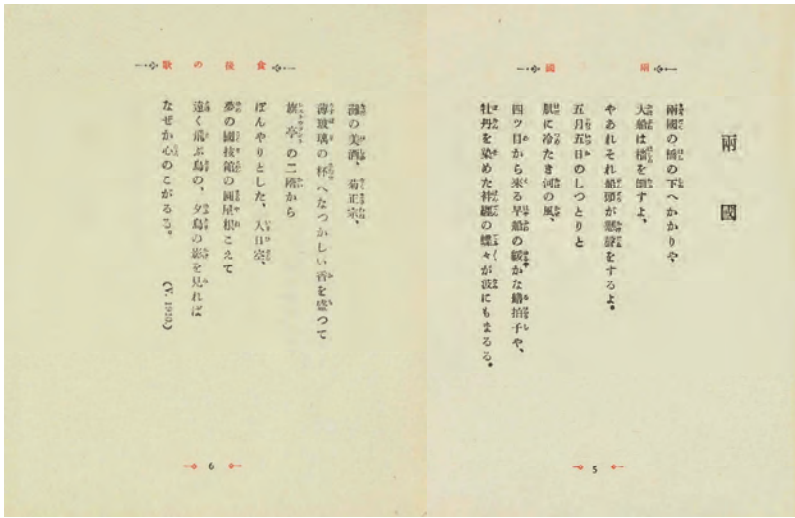
宮崎 真素美（日本文学部国語国文学科）

◆北原白秋の病める東京（『東京景物詩及其他』大2）



わが眺望は、
ありとあらゆる悲愁の外に立ちて、
東京の午後四時過ぎの日光と色と音を怖れたり。
七月の白き真昼、
空気の汚穢うち見るからにあさましく、
いと低き瓦の屋根の一片は専法に鈍く黄ばみたれ、
あかあかと屋上欄に屹瀝たる雑貨の店か、
（新嘉坡の土の噂は漢大小の香とうち咽ぶ）
また、青ざめし羽根板の安料理屋の窓の内、
ただ力なく、女は頭かたむけて髪流るる。
（私性児の泣く声は野菜とハムにかき消さるる。）
洗濯屋の下水はその時に物干の段をのぼりたり、
男のにはひ忍びつつ、いろいろのシャツをひろげたり。
九段下より神田へ出づる大路には、
札きりに急ぐ電車をば四十女の婦人の来て止めたり。
斜かひに光りしは童貞の帽子の角か。
かかる間も収まり難き困憊はとりとめもなくうち歎く。
磯の深めらへる伊の中
磯王樹の蔭に踏みみて日向ぼこせる洋館の病児の如く泣くもあ
り。
煙州工場の煙突掃除のくろんぼが通行人を罵る如き声もあり。
白昼を按摩の臥病
許睡のあとに徳急さに雪駄ものうく
白粉やけの素顔して湯にゆくさまの芸妓あり。
交番に巡査の電話、
広告の道化うち清みつつ火事場へ急ぐときあり。
また間切敷けて浮なる支那学生さへは
氷室の看板かけてベンキのはこび眺むることく、
印刷の音の中、色赤き草花凋え、
ほどちかき外科病院の裏手の路次、門扉は
げにいかかはしき病の臭気こもりたり。
（いま妄想の疲れより、ふと起りたる
葉種屋内の自殺、
下手人は色白き去勢者の母。）
何かは知らず、
人かげ絶えてただ白き裏神保町の眼路遠く、
肺病の皮膚青白き洋館の前を疲れつつ、
「刹那」の如く攪ざりし電車の洞の白、色は一瞬にして隠れたり。
いたづらに玩弄品の如き劇場の壁薄あかく、
（亡き人おもふ哀愁はそよより来る）
見るとからに温室の如き写真屋に昼の瓦斯つき、
獣医の家は家畜の毛もそよより来る、
歯科病院の帷は入歯のごとき色したり、
経の真中にただひとつ、研ぎすましたる悲愁か、
剃刀の如く閃々と銀の光は瞬たり。
あらゆるものの疲れたる七月の午後、
わが眺望の凡ての色と音と光を圧すごとく、
凡ての上に向ち、
「東京の青白き墳墓」
ニコライ堂の内秘は、薄闇き円頂閣を越えて
大釣鐘は騒がしく、堂の内と外とに鳴り響く。
鳴り響く、鳴り響く、……

◆木下杢太郎の江戸/東京（『食後の唄』大8）

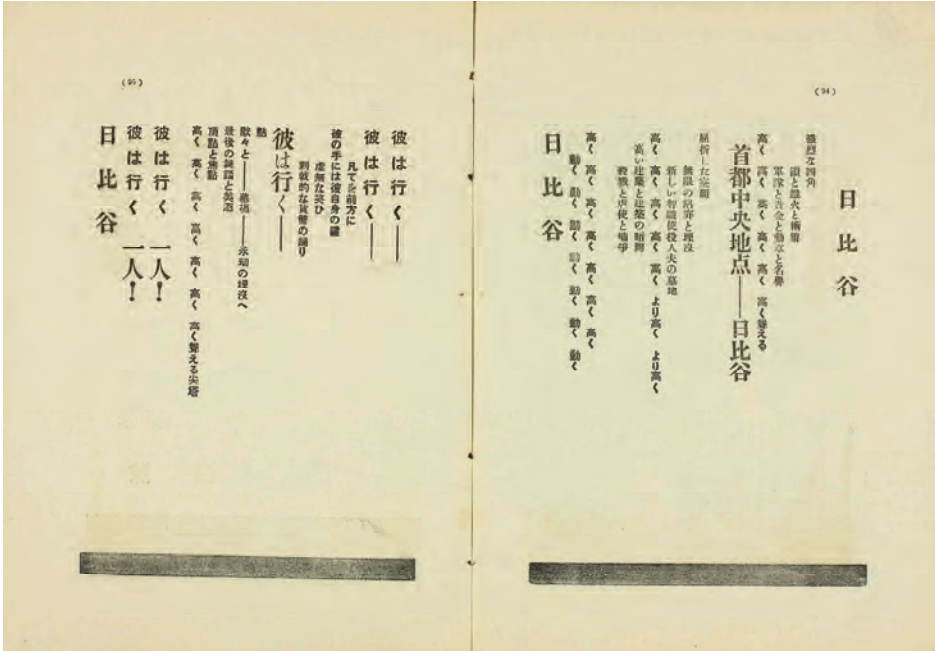


北原白秋、木下杢太郎は、
「パンの会」に集い、偶田川に
開化後のモダン都市東京に

九段下から神田、裏神保町、駿河台の町と人に込められたくありとあらゆる悲愁、
〈汚穢〉や〈困憊〉、〈病児〉をくむ
〈白〉や〈黄ばみ〉、〈赤〉、〈青白〉、〈薄青〉、〈青ざめ〉、〈銀の光〉
とともにある〈いと低き瓦の屋根〉、〈安料理屋〉、〈電車〉、〈洋館〉
〈煙突工場〉、〈外科病院〉、〈獣医〉、〈歯科病院〉、〈写真屋〉、〈理髪〉
……にめぐり、この倦怠の午後と、その青白き墳墓、
ニコライ堂の明と、特徴と
とも、〈凡ての上に向ち、
「東京の青白き墳墓」
堂の明と、特徴と
24年竣工の銅板葺きドームを
瓦造りの高直
したがる、関東大震災で倒壊。修復と一部
が変更
されて

白秋「眺望」から一年後（明治43年）の作。俗謡調ではじめてられる前半は、江戸情調を湛えた勢いのある風情につらぬかれている。後半は、〈菊正宗〉を前半との蝶番としながら、〈薄玻璃の杯〉、〈旗亭（レストラン）〉が江戸と明治モダンを交差させ、〈夢の国技館の円屋根〉が、その交差の最たる存在としてあられる。相撲興行をおこなうために竣工されたばかりのこの国技館は、大鉄傘と呼ばれた巨大ドームを擁した当時最新の西洋建築だった。西洋趣味のたゆまぬ賑わい、その話調とも、明治末の都市空間が持つ

◆萩原恭次郎の苛烈なる運動体（『死刑宣告』大14）



白秋の〈ニコライ堂〉、杢太郎の〈国技館〉
（*）が損なわれた、関東大震災直後の都市
は、文やあは、と共鳴した。倒壊したヨ一容り
や口をウ集物あり、にも、「振元さ減退と物質性」による「表
象の変質を記録した（小泉美「萩原恭次郎・岡田龍夫『死刑宣告』論」『日本近代文学』92号 平27・5）とも指摘される。

*「両国」でうたわれた初代国技館は大正6年の失火により全焼、9年に再建されたが、12年の関東大震災で再度焼失した。

*詩集書影及び本文画像は、いずれも「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」に拠る。

余暇とテクノロジーについて



情報科学部 奥田隆史

(数理モデルと問題解決)

不安と生の研究会

はじめに： SF (サイエンス・フィクション) の①法則, ②名作を紹介するとともに, 私個人の余暇について考えてみました. 上の写真は, 私の箸置です. 家族が「父さんの休日ポーズ」としてプレゼントしてくれたものです.

①「ダグラス・アダムスの法則」—私の場合は成立していそうです

「ダグラス・アダムスの法則」とは, SF 作家ダグラス・アダムス (1952~2001 年)が提示した人間とテクノロジーに関する経験則で, ①自分が生まれたときに世の中に存在したものは普通で当たり前のものと感じる, ②15歳から 35 歳までに発明されたものは新しく刺激的で革命的に感じる, ③35 歳以降に発明されたものは物事の自然の摂理に反したものと感じる, である. 私の場合①はテレビ, ②はパソコン, インターネットになります. ③に該当するのは SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) です. 不特定多数の人に眩くことは不自然と感じるせいか, SNS は本来の目的には使わないです. なお夜間, 週末はパソコンもオフラインにします.

②「余暇の芸術」 (ショートショート的神様 星新一) は預言の書か?

「余暇の芸術」は『未来いそつぷ』(新潮社, 1971 年)に収録されています. そのあらすじは次の通りです.

技術革新がめざましく進んだおかげで, 労働時間が短縮され, いまや週休三日. 休日になると, 誰もが絵画, ビデオ芸術などの創作に励むようになり, 皆, その成果を見せたくて, 発表会, 展覧会を頻繁に開くようになる. 周囲の人間は付き合いで見に行かざるを得ない. 折角の休日がそれらを回ることによって疲れてしまう.

現代の SNS 疲れと似ていませんか. なお星氏の『声の網』(角川, 1985 年)も監視社会を預言しています.

選書について： 余暇, 休日を増やすことにつながる広義なテクノロジー (自動制御, 自動化, 機械化, パソコン・インターネットの本来の目的, 働き方, マインドセット, 渋滞学) に関する書籍を選んでみました.

日本近代文学における地方へのまなざし

若松伸哉（日本文化学部国語国文学科）

◆地方に見出された〈日本〉

或るとしの春、私は、生れてはじめて本州北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかかつて一周したのであるが、それは、私の三十幾年の生涯に於いて、かなり重要な事件の一つであつた。私は津軽に生れ、さうして二十年間、津軽に於いて育ちながら、金木、五所川原、青森、弘前、浅虫、大鰐、それだけの町を見ただけで、その他の町村に就いては少しも知るところが無かつたのである。

—太宰治『津軽』（1944年）冒頭

太宰治『津軽』（1944年）は、故郷である青森を再発見的に語った作品として有名だが、この作品が〈作家がその故郷を語る〉コンセプトのもとに刊行された小山書店による「新風土記叢書」シリーズの一書であることは意外と知られていない。戦時下の日本では軍国的ナショナリズム高揚のなか、西洋化した都市ではなく、地方にこそ〈日本〉があるという言説が顕著に見られる。作家・岸田国士が部長を務めた大政翼賛会文化部が推進した〈地方文化運動〉はその具体的なあらわれだが、地方を甘美に語る文学者もこうした流れに関わっていたと言える。心の郷愁を誘う地方は古き良き日本として、戦時下では政治的文脈も呼び込む場でもあったのだ。

◆寺山修司の描く地方

大工町寺町米町仏町老母買う町あらずやつばめよ
新しき仏壇買ひ行きしまま行方不明のおとうとと鳥
ほどかれて少女の髪に結ばれし葬儀の花の花ことばかな
亡き母の真赤な櫛を埋めにゆく恐山には風吹くばかり

—寺山修司・映画『田園に死す』（1974年）冒頭の短歌

戦後に活躍した歌人・俳人でもあった劇作家・寺山修司は故郷に執着した文学者の一人でもあった。しかし、彼の描く故郷・青森は甘美ではない。寺山の代表作である映画『田園に死す』（1974）は、地方の醜悪さ・猥雑さが極端なまでに誇張・デフォルメ化されており、見る者に嫌悪感さえ与える。戦後の高度経済成長は日本の経済力を押し上げると同時に、労働力を必要とする都市へ地方からの人口移動を劇的に促した。都市と地方という問題は、高度経済成長を経て大きな社会的意識となるが、地方の醜悪さを郷愁とともに過剰に顕示する寺山の作品は同時代において明らかに異質でありながらも、その表現の強度は地方の持つ複雑なポテンシャルを感じさせる。

ときに政治的・社会的な文脈にも晒されながら、都市との緊張関係のなかで文学者たちの想像力を喚起する地方という場は、これからも文学的想像力の源泉となり得るのかもしれない。

不安と生の研究会

墓地・墓参にみる故人との絆

田上 恭子(久留米大学文学部心理学科)

■ 故人との継続する絆理論と伝統的な日本の文化 ■

- ☞ 「死者に対する日本人の態度を単純な「先祖崇拜」として批判的に捉える欧米の宗教学者がいるが、それを高く評価して世界で紹介したのは、本書にも紹介されるデニス・クラス氏の「続いていく絆」(Continuing Bonds)理論である。日本人の先祖供養にヒントを得て、故人と生前から続く精神的な絆(Continuing Bonds)を持った方が健全である、とクラス氏らは提案する。愛する者の死を受容するためには、意識的に死者を忘れたり拒んだり乗り越えたりする努力をするのではなく、むしろ儀礼や祈り、心の中での対話などが時に必要であるという」(ベッカー, 2015, p.13)
- ☞ 「かつて多くの日本人は、人は死んでも死者として存在し、残された人々は死者と何らかの関係をもちうると信じていたという。葬送儀礼は、死者の靈魂を、「この世」から「あの世」へ送り出すために行われ、残された者は死者を「見送る」のであり、死者は「旅立つ」のである。…(中略)…「あの世」と「この世」は交流可能であり、先祖の靈は、お盆やお彼岸になると「あの世」から一時的に現世に戻って来る。このように「あの世」は、「この世」と隔絶した世界ではなく、生者と死者の世界はあいまいである。それゆえ、「亡き人が草葉の陰から見守ってくれている」という表現が示すように、日本人は身近な「あの世」に死者が存在していると考えられる傾向がある。それに対し、ユダヤ教やキリスト教では、死はすでに神の領域に属するものであって、神の支配の下に生の領域と死の領域とが明確に分けられており、この点で生者と死者との境界があいまいな日本人の考え方とは異なる(平山, 1991)」(坂口, 2010, pp.144-146)

地方(日本)における墓参の風習

- ・ 青森県津軽地方のお盆:「法界折」(お墓参り用のお弁当。精進料理や果物、お菓子などをつめたもの)をお墓参りの際に墓前で食べるのがしきたり。
(鈴木 士郎他(著)『東北のしきたり』MM新書, 2017年)

- ・ 津軽地方の大学生を対象とした面接調査
⇒現在も、お盆には家族で法界折を持って墓参。以前は家で作っていたが、今はスーパーなどで購入。墓で食べることは無い。「法界折」

<https://kyodokan.exblog.jp/31243778/>



■ ドイツ/ヨーロッパにおける墓地・墓参 ■

- ☞ 「ヨーロッパのお墓は庭園のような趣の明るい墓地が多く、ジョギングや散歩をして過ごす人々をよく見かける。墓地は普段の生活の一部にもなっている。家族の墓を訪れるだけでなく、花や蠟燭で美しく飾られた墓地巡りをする習慣がある。」(ネイチャー&サイエンス, 2016, p.7)

都市部(ドイツ)における墓地

- ・ ハンブルグ市フリートホーフ・オールスドルフ墓地:
世界で一番広い公園墓地だといわれる(約400ha)。全体が森林であり、美しい造園による景観を保っている。



(横村 久子 (2020). ドイツ・オランダ・ベルギーの墓地と火葬場の近年の変化—市民の意識と経営的な変化— 研究紀要(京都女子大学宗教・文化研究所), 33, 71-96.)

- ☞ 「市民墓地は居住地から離れて新設され、生者と死者の棲み分けの象徴となっている」、「市民墓地は公園のように散歩できる場所でもある。ただ、そこに死は見えない」(下田, 2023, p.47, p.78)

地方(ドイツ)における墓参

- ☞ 「現在カトリック教徒は11月2日の万霊祭に墓場を行列し、先祖の墓参りをする。……伝統的カトリック地域では先祖の墓参りの習慣が存在していた。たとえばトリーア司教区では、中近世から19世紀前半まで、万霊祭以外の祭日に先祖の墓参りをしてきたという記録がある。」「トリーア司教区のように、前キリスト教的先祖崇拜の習慣が、キリスト教の典礼に取り入れられ、残存している地域もあった。」「バイエルンでは、19世紀にはいっても、結婚式前や当日に先祖の法要や墓参りがおこなわれていた。先祖崇拜、墓参りの風習は、記録こそ少ないが、各地にかなり存在していたのではないか」(下田 淳(著)『ドイツの民衆文化—祭り・巡礼・居酒屋』昭和堂, 2009年, pp.149-151)

前近現代の祖先崇拜

- ☞ 「古代ギリシア人・ローマ人・ケルト人・ゲルマン人も祖先の墓に詣で飲食物を供し、墓で会食した」、「前近代社会の生と死は棲み分けがされておらず混淆していた」、「古代ローマでも、……生者と死者は親密に交流していた」(下田, 2023, p.34, p.38, p.149)

「真駒内滝野霊園」

<https://www.takinoreien.com/pages/49/>



■ 近代化と都市化 ■

- ☞ 「ヨーロッパの市民墓地の日本版は、……多摩墓地が最初であった。「公園墓地」と呼ばれていた」(下田, 2023, p.158)
- ☞ 「ヨーロッパ近現代は、時間と空間を「能動的に棲み分ける」特徴をもっている。死に関しても同じである」(下田, 2023, p.197)

「日本を含む先進諸国では近代化、都市化現象が進み、地域社会の連帯感が希薄になり、葬送儀礼や伝統的慣習は次第に形骸化しつつある。……儀礼や慣習の簡素化は、社会構造の変化に伴う必然的な流れともいえるが、悲嘆の過程は容易に簡略化できるものではなく、伝統的慣習が果たしてきた役割をあらためて見直す必要があるのではないかとと思われる」(坂口, 2010, pp.147-148)

不安と生の研究会